

関西学院大学 研究成果報告

2025年 5月 15日

関西学院大学 学長殿

所属： 文学研究科・文学部
職名： 教授
氏名： 景山洋平

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	☒ 特別研究期間 ☐ 自由研究期間 ☐ 大学共同研究 ☐ 個人特別研究費 ☐ 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	ハイデガー哲学の精神的状況に着目した現象学的存在論における人間概念の解明
研究実施場所	主にウォーリック大学（英国）、また欧米の各大学
研究期間	2024年 4月 1日 ～ 2025年 3月 31日（ 12 ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

英国のウォーリック大学（コヴェントリー）でvisiting professorの身分を得て、同大学を拠点として特別研究の課題を遂行した。具体的には、古代ギリシャ哲学と中世哲学の内で特にアリストテレス『自然学』の第一巻における古代ギリシャの自然学研究の対話状況に力点を置いて研究・考察を進めた。本課題で問題となるハイデガー自身は対話状況に明らかに着目しているものの、従来の研究ではこの点を主題的に考察している者が全くいない。それゆえ、なによりまず対話状況に着目するハイデガー自身のアプローチの現象学的意義を評価する学問的方法を確立する必要があり、そのために、伝統的なアリストテレス研究の手法を学ぶために二次文献を集中的に読解した。その成果として、プラトンとアリストテレスの著作における「運動」の概念と、両哲学者における探求の方法論（問答法とエピステーメ）との関係に着目するアイデアを得た。また、下記で再度触れる2025年2月11日～12日のドイツ・テュービンゲン大学開催のワークショップで同席したイタリア・ウディネ大学のプラトン研究者Salvatore Lavecchia教授とのやり取りから、古代ギリシャにおける自然運動と探求言語の問題系を、19世紀以降の広義の実存思想に接続する手がかりを与えられた。

また欧米の関連研究者とのネットワークもできる限り課題に即して進めた。2024年5月29日～30日の英国・オックスフォード大学開催のシンポジウム”Ontological Pluralism”に参加し、Mark Wrathall（オックスフォード大学）、Kate Withy（ジョージ

タウン大学)、Sach Golob(キングズカレッジ・ロンドン)など英語圏を代表するハイデガー研究者と知己を得た。なお、同シンポジウムの企画者であるTobias Keiling(ウォーリック大学)は、元々課題遂行者のウォーリック大学における引受人である。また7月11日には、ドイツ・テュービンゲン大学から招待を受け、Gesellschaft fuer Interkulturelle Philosophie(間文化哲学協会)の国際レクチャーとして招待講演”Kitaro Nishida with and against the Openness of the Phenomenological Concept of the World”を行った。これに伴い、同大学のThe College of FellowsのディレクターであるNiels Weidtmann博士との研究協力関係を構築した。その後、7月29日に、オンラインの国際学会Asian Philosophical Text Conference(ホスト校:エディンバラ大学)で口頭発表”Masakazu Nakai’s Aesthetics of Labor and the Logic of Committee – Anti-Fascist Response to Heidegger – “を行った。その後、8月2日には、イタリア・ローマ＝ラ＝サピエンツァ大学開催のThe World Congress of Philosophyで、アジア圏(韓国、台湾、大陸中国、フィリピン、イラン)のハイデガー研究者とともにHeidegger Circle in Asiaのワークショップを開催し、自分でも”Humans respond to language by grabbing you by the collar – Daisetz Suzuki’s modern appropriation of the Zen Buddhist notion of Mui-Shinnin and its impact on the later Heidegger’s philosophy of language – “を口頭発表した。その後、10月28日と11月1日に、フランス・エコールノルマルシュペリウル(高等師範学校)で、ハイデガー研究者のChristian Sommer教授を二度訪問し、ハイデガーのアリストテレス自然学解釈に関する私のアプローチを説明した上で、意見を頂いた。またその他にも日仏両国におけるハイデガー研究の歴史的状況について情報交換しつつ、今後の研究協力を確認した。11月22日には、英国・エディンバラ大学から招待を受けて、The World Philosophy Lecturesの一貫として招待講演”Ontological Plurality and History of Nothingness: Two Problems in Japanese Reception of Heidegger”を行った。これにより同大学の森里猛講師との研究協力関係を構築したと共に、同大学の若手研究者を関西学院大学に招待することも計画されている。翌年の2025年1月17日には、米国・ジョージタウン大学で、ハイデガー研究者のKate Withy教授を訪問し、ハイデガーの後期言語論に着目する私の人間概念研究のプロジェクトについて説明して意見を頂いた。また、日米のハイデガー研究の状況について情報交換しつつ、今後の研究協力を確認した。その後、2月4日には、英国・ウォーリック大学から招待を受け、Warwick Post-Kantian Philosophy Seminarの一貫として招待講演”Japanese Philosophers Thinking with and against Heidegger: The Evolution and Dissolution of Ontological Pluralism”を行った。その後、2月7日~9日の期間で、ドイツのボイロン修道院で、19世紀末から20世紀初頭にかけてのキリスト教文化の動揺と変貌、およびそこにおけるハイデガーの位置づけに関して資料収集を行った。その後、2月12日に、テュービンゲン大学から招待を受けて、ワークショップ”Belonging to the In-Between”で招待講演”How Should We Cope with the Diversity of Dialogue as a Medium of In-between? – Considering the Case of the Kyoto School and Heidegger – “を行った。

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構(NUC)

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。